

サーファーに関する実態調査
～ローカル、ビジター、種子島の移住サーファーの特性～

学籍番号：12022005

氏名：榎本祐作

担当教授：立木茂雄

サーファーに関する実態調査

～ローカルサーファー、ビジターサーファー、種子島の移住サーファーの特性～

学籍番号 1202005 榎本祐作

はじめに 研究動機と考察の対象

第1章 サーフィン、サーファーに関する先行研究および基本情報

第1節 日本におけるサーフィンの受容過程

第2節 ローカルサーファーとビジターサーファーについて

第3節 種子島の移住サーファーについて

第2章 ローカルサーファー、ビジターサーファー、種子島の移住サーファーの特性

第1節 仮説

第2節 調査

1. 調査方法

2. 調査対象

3. 調査場所

第3章 調査結果

第1節 地域別

第2節 カテゴリー別

第4章 考察

第1節 地域別

第2節 カテゴリー別

第5章 結論

おわりに 今後の課題

参考文献

巻末資料

はじめに 研究動機と考察の対象

筆者がサーフィンやサーファーに関する卒業論文を書こうと思った動機は、単純に自身が今年初めてサーフィンを経験したからである。サーフィンを趣味とする友人の影響でかねてからサーフィンには興味があり、念願叶って今年サーフィンに挑戦することが出来た。そしてサーフィンの大変さや難しさ、何より楽しさを身をもって体験したわけだが、もちろんそれだけでは卒業論文、ましてや社会科学の研究にはならない。サーフィンやサーファーを卒業論文のテーマにする大きなきっかけは、サーフィンに向かう車中の友人の言葉であった。友人は「サーファーはガラが悪い」「サーファーは頭が悪い」「サーファーは土方が多い」など、そんな言葉を言っていた。これはあくまで友人の個人的な意見であるが、ふと考えると確かに学生の私もサーファーに対してそんなイメージを少なからず持っているように感じた。私や友人だけでなく、一般的に見てもサーファーに対するイメージはいくらか固定観念があるようにも思う。「カッコいい」「異性にモテそう」「自由人」「ナンパな感じがする」「ガラが悪い」など様々なイメージが付きまとう。趣味がサーフィンの有名人も多くいる。あらゆるスポーツの中でここまで容易にイメージが浮かぶスポーツも珍しいように感じた。そして私のなかで疑問が浮かんだ。「本当にサーファーは頭が悪いのか」「本当にサーファーは土方が多いのか」と。

そしてもうひとつ気になった友人の言葉がある。「ローカルは見たらすぐにわかる」「俺らビジターは・・・」ローカル、ビジター、聞き慣れない言葉であったので友人に意味を聞いた。簡単に言うと、ローカルは地元のサーファーであり、ローカルは都市圏から車で何時間もかけてサーフィンスポットに行くサーファーだと言う。

また私のなかで疑問が浮かんだ。「ローカルとビジターでは何か違いがあるのだろうか」「ローカルやビジターには何か特性があるのだろうか」と。

つまり本論での考察の対象は「ローカルサーファー」と「ビジターサーファー」である。

そして近年種子島へのサーフィン移住が増加しているという事実から「種子島の移住サーファー」をもう一つ対象として加えることにする。そして本論では「ローカルサーファー」「ビジターサーファー」「種子島への移住サーファー」の三者を調査、比較し、三者の諸特徴や相違点を見つけることを目的とする。

本論はサーファーという特定のスポーツを楽しむ人々を対象とするものであり、サーフィンをしない人々にはいくらかわかりにくい部分があると思うので、次章ではサーファーやサーフィンに関する

先行研究、基本情報について言及することにする。

第1章 サーフィン、サーファーに関する先行研究および基本情報

第1節では、『日本におけるサーフィンの受容過程』（小長谷悠紀 2005）、第3節では、『種子島のサーファー移住：自然の発見と新たな人間的結合の創出』（内藤考至 2004）の論文の一部を抜粋、要約して記述する。

第1節 日本におけるサーフィンの受容過程

今日までの国内におけるサーフィンの受容過程は、3期に時期区分される。国内での受容過程が顕在化した1960年代初頭から、関連産業や活動手本が出揃う1970代半ばまでを「第1期：輪郭形成期」と呼ぶ。1961, 2年頃、湘南の大磯・鵜沼・辻堂、外房の勝浦・鴨川、伊豆の白浜等で今日現存するものも含めて幾つかのサーフィン・クラブが創られ出し、コンテスト等も催し始めた。これらの先駆地については、米軍基地との近接性以外でも、古くからの海岸別荘地・行楽地で、地域の交流人口も多く海の遊びが浸透していたことが共通する。また、これとは別に、鶴岡市湯野浜付近では、太平洋航路の船員によりボートが輸入され、やはり早期にサーフィンが始まった。

同じ頃、ハワイロケの映画でサーフィンを披露した加山雄三が、私生活でも自作したボートを用いて茅ヶ崎の海岸で波の乗り、スポーツ紙に報じられた。輸入ボートは希少・高価だったのもあり、加山も含め湘南の初期の活動者は比較的裕福な家の者が多かったと聞かれる。

1964年夏、湘南海岸に局地的にサーファーは急増した。これには、当時の映画や音楽の影響が考えられるほか、当時の若者の海外志向を促進したとみられる人気の男性誌『平凡パンチ』が、夏に先立ち「サーフィンの夏だ！ウエストコーストのサーファーズ」と巻頭写真グラビアに5ページ割っていたことも関係している。また1965年おわりには日本サーフィン連盟が発足された（小長谷 2005）。

サーフィン関連業を見ると、1968年頃から丸井などの百貨店や総合スポーツ用品店などがサーフィン市場に乗り出している。

1971年には国内著作の単行本としては最初のサーフィン入門書が刊行され、1976年には国内初の専門誌『サーフィンワールド』が創刊された。

このように、今日にも共通するサーフィン関連商品の多く、および未経験者にもすぐそれと判る「活動の手本」は、60年代から1970年代半ばまでの間に出揃い、この時期にサーフィンの大衆化

舞台が構築された。

「第Ⅰ期：輪郭形成期」の段階を経て「第Ⅱ期：大衆化期」に移行する。この時期の前半は1970年代後半にあたり、「サーフィンファッションが今年の流行」「急速なサーフィン・ルックの流行」など、多くの雑誌や新聞に取り上げられている。サーフィンブームの起爆剤として知られる『POPEYE』は1976年に創刊された。サーフインは1979年夏には「ブーム爆発」「今をときめく」などと表現され、テレビCMではハワイのサーファーが波のパイプをくぐり、大学ではサーフィンサークルが華やかな存在として認知された。米国のサーフィンブームは西海岸の高校生に始まったが、日本では大学生に火がついたのである。

またサーファー風な装いや飲食店がもてはやされ、誇らしげにボートを積むワゴン車が目立った。1978年頃から六本木や新宿等の繁華街には、旧来のディスコと色を違えた「サーファー・ディスコ」が出現し、「サーファー」は「盛り場ファッション」としての印象も強めた。こうした店では、金曜日の夜に遊んだその足で湘南や千葉の海岸に繰り出すのが定式化し、また「湘南在住サーファー」と言えば、女性にもてるという意味通りの良い「ブランド」になった。

ところが、1980年頃のなると「サーフィンをすることが新しい」、あるいは「大勢がサーフィンをしに行く」といったことのニュース・バリューが失われ、マスコミの関連記事は事故、事件、批判の声などの記事に傾倒していく。「ゴーバック・サーファー運動」が生じた三重県浜島町をはじめ、適地海岸を有し、とりわけ「観光公害」とそれまで縁のなかった地区で「サーフィン公害」が問題化したこと、大麻所持逮捕者がサーファー仲間であった事件、サーファーの海難などである。マスメディアを介して社会の大多数が受け取り得るサーファーの印象は変わったと見なされる。

「第Ⅱ期：大衆化期」の後半は1980年代にあたる。1982年の一般雑誌でのサーフィン記事は、前年の半数以下であった。サーファー・ディスコに代表されたディスコ人口も1982年690万人でピークを向かえ、1983年からは減少に転じた。80年代半ばに向かって、日本のサーフィンと「それ風のもの」は、明らかにファッション性を喪失した。しかし、流行の後期追随者が追いついてくるのは、そのようにして先進性が薄れてしまった頃である。1981年7月、都内と湘南を結ぶ路線を持っていた小田急電鉄が、利用者の要望に応え、サーフ・ボードの車内持込をみとめた。この後、海岸が近い鶴沼海岸駅などに車を持たない高校生などの若年サーファーの姿が目立つようになった。また、1979年までの日本サーフィン連盟の加盟クラブの所在県は22都府県に過ぎないが、

1986年では42都道府県となっている。日本のサーフィンが全国的な伝播、大衆化を遂げたのは、ファッション性、話題性を減じればばらく経った、1980年代半ばとみなされる(小長谷 2005)。

なお、後期追随者の活動参加に先立つ前期多数採用者層の参加以降、同時進行するもうひとつの側面として、活動主体であるサーファーのなかでの分節化とその主張の声が高まったことを挙げておきたい。例えば、「こちらは地元である」といったローカリズムの話題が目立ってきたのは、1980年代に入ってである。また、この頃から主に東南アジアなどの海外でサーフィンをする者も現れてきた。

ここまででサーフィンは全国伝播、大衆化を終える。そして1990年代以降は「第Ⅲ期：ポスト大衆化」にはいる。大学サークルのサーフィンは80年代に比べ衰退したが、これはファッション性の喪失に関係があるだろう。ただ、年齢がやや高めの世代で、90年代初頭からまたロングボードを用いる者が現れた。

自治体・地域社会では、主に「地元のサーファー」に対する再評価が進んだ。これは、家族でのサーフィンが珍しくなくなったこと、幼少時からサーフィンに親しんだ者に牽引されて若年層を中心に技能重視志向が増加したこと、また、地元サーファー等が中心で行う海岸清掃も活発化していることなどに関係があるだろう。地域社会の目に映るサーフィンは、かつての時に悪評をも伴った遊びから子供も行う健全なスポーツと目されるようになってきた。また、サーフィンの普及の当初は国内における在留米国人との異文化交流であったが、昨今は異文化交流の手段としてもサーフィンに注目が集まっている。

このように日本におけるサーフィンの受容過程は、国内での受容進行が顕在化しだした1960年代初頭から、関連産業や活動手本が出揃う1970年代半ばまでが「第Ⅰ期：輪郭形成期」としてあり、この段階を経て「第Ⅱ期：大衆化期」に移行した。1977年に若者雑誌に主導されたファッション性の創出を契機にブームが生じ、この後、1980年代を通じて、もはやファッション性が劣化したなかで、経済的あるいは地理的に活動環境が劣位な参加者も内包にいたる「大衆化」が達成された。「第Ⅲ期」は、「ポスト大衆化」という意味から1990年以降が位置づけられた(小長谷 2005)。

第2節 ローカルサーファーとビジターサーファーについて

残念ながらサーファーに関する先行研究は極めて少ない。またその研究は単なる実態調査に留まっているものが多い。その理由としてはその研究や調査が観光に関するものや過疎化問題に対するものであることが考えられる。社会科学の見地からサーフィンやサーファーを捉えた文献はほとんど見当たらなかった。した

がって「ローカル」と「ビジター」を明確に示す既存の定義が存在しない。そのため本論では一般的にサーファーの人々が思う「ローカル」と「ビジター」のイメージをその定義の根本にした。まず「ローカルサーファー」は文字通り「地元のサーファー」であり、特定のサーフ・スポットの周辺に住んでいる。つまり特定のサーフ・スポットまでの交通距離は非常に近いことになる。逆に「ビジターサーファー」は「訪問者のサーファー」である。ビジターサーファーは主に都市圏に在住し、サーフ・スポットまでの交通距離は遠い。このサーフ・スポットまでの所要時間の違いは「ローカル」と「ビジター」とを定義する大きな要素であり、多くのサーファーはこのサーフ・スポットまでの所要時間の違いで「ローカル」と「ビジター」とを区別していることが多いようだ。

しかし所要時間だけが「ローカル」と「ビジター」とを区別する要因なのだろうか。サーファー自身が自分が両者のどちらだと感じているかも重要になってくる。またそのサーフ・スポットで海岸清掃をしているのか、そのサーフ・スポットでのサーファー仲間の数、週何回そのサーフ・スポットに顔を出しているのか、など「ローカル」と「ビジター」を定義するほかの要因もあるかもしれない。やはり「ローカル」と「ビジター」を明確に定義することは難しい。そこで本論では、調査対象となるサーファーに対して配布するアンケートに「このサーフ・スポットで自分はローカルとビジターどちらだと思うか」「このサーフ・スポットでの海岸清掃の経験はあるか」や、サーファー仲間の数、週何回サーフィンに行くかなどの質問項目を設けることにした。

先行研究がなく、既存の「ローカル」と「ビジター」の明確な定義が存在しない。また両者を区別する可能性がある要因もいくらかあるため、本論ではサーファー自身の判断を優先することにする。つまりサーファー自身がこのサーフ・スポットで「ローカル」と思うか「ビジター」と思うかを定義にする。

第3節 種子島の移住サーファーについて

種子島は、西之表市、中種子町、南種子町の一市二町からなる。西之表市は鹿児島県の南方115キロメートルに位置する。種子島は、歴史的には鉄砲の伝来で、最近では南種子町の宇宙センターが有名である。産業としては第一次産業が中心で、サトウキビ、甘藷、たばこ、米などが主要作物である。周囲が海で囲まれており漁業も盛んで、イセエビなども獲れる。そしてその種子島に10年ほど前から若者のサーフィン移住が急速に増加している（内藤 2004）。その数は定かではないが300人くらいいるのではないかとと言われて

いる。彼らは種子島の波を求めて移住してくる。離島への流入現象として都市就業者の農業への新規参入や農家の後継ぎのUターン現象などがあるが、彼らは仕事ではなく、生きがい（趣味）を求めての移住である点で特異である。種子島の移住サーファーの大きな特徴として年齢的には20代から30代が圧倒的に多い。そして出身地は全国各地にまたがっているが、特にその多くが関西、関東の大都市圏からの移住が多い。また移住年数は10年以上の永住目的の人々もいるが、その多くは数年間の一時的移住者である（内藤2004）。

第2章 ローカルサーファー、ビジターサーファー、種子島の移住サーファーの特性

第1節 仮説

前章でサーフィン、サーファーに関する先行研究および基本情報を述べてきた。その中身は日本におけるサーフィンの受容過程と、本論で調査、研究の対象となるローカルサーファー、ビジターサーファー、種子島の移住サーファーについてである。

序章で述べたようにサーファーは「ガラが悪い」「頭が悪い」「土方が多い」というようなイメージが少なからず付きまとう。そのことから今回の調査では「学歴」と「職業」の二つが大きな要素になると考える。またこのようなサーファーのイメージは、日本のサーファーのなかで大部分を占めるビジターサーファーのイメージであるように感じた。その根拠として、まず当然日本のサーファーのなかで大部分占めるため、ビジターサーファーがローカルサーファー、種子島の移住サーファーに比べ、世間のサーファーのイメージ形成に大きな影響を与えていることである。またビジターサーファーはサーフィンをするために都市圏から何時間もかけ海に出かける。都市圏に住むサーファーがサーフィンをしようと思うとまず何より車がある。サーフボードを持って電車移動は困難である。金銭的にも高速代やガソリン代、そのほかにもサーフボードやウェットスーツなど、サーフィンをするとなるとそれなりのお金がかかる。つまり、早い時期から社会に出て働いている人々のほうが大学生などに比べ金銭的に余裕があり、車を所持している可能性も高いため、サーフィンを始めやすい環境にあるといえる。つまりビジターサーファーは中卒や高卒などの「低学歴」になる可能性がある。その結果、建設業やサービス業などの職業が多くなる可能性が高いと考えられる。では、ローカルサーファーはどうだろうか。ローカルサーファーはサーフィンスポットの近くに住んでいるため、明らかにビジターサーファーに比べ金銭がかからない。また車を所持していなくても

距離的に問題のないケースもある。この点ではローカルサーファーには「低学歴」になる要因は見当たらない。職業の面では、そのサーフィンスポットが都市部からどれくらい離れているか、元々サーフィンスポットの近くに住んでいたのか、それとも移住してきたのかなどで大きく違ってくるため、いちがいには言えない。しかし少なくともビジターサーファーと比べ多様な職業の人々がいる可能性が高い。

このように今回の調査では、ビジターサーファーとローカルサーファーの相違点は「学歴」と「職業」であると仮説を立てることにする。

種子島の移住サーファーは第1章の第3節でも述べたように、関西や関東の大都市圏からの移住が多いため、いわば元ビジターサーファーが多いといえる。そのため諸特徴もビジターサーファーに近いものになると考えられる。しかし、ビジターサーファーの一部だけが種子島に移住するのはなぜなのか。そのまま都市圏に残りサーフィンを楽しむビジターサーファーと波を求めて種子島に移住するサーファーとの間にも何らかの相違点があるのか。今回の調査でその相違点も発見できればと思う。

第2節 調査

1. 調査方法

サーフィンやサーファーに関する質問票を作成し、各サーフィンスポットに来ているサーファーの方々に回答してもらおう。質問票は20個の質問で構成されている。

また、今回の質問票は『種子島の移住サーファー：自然の発見と新たな人間的結合の創出』（内藤考至 2004）で調査の際に使用された質問のいくつかを使い、それに加えて筆者自身で設けた質問を付け加えている。

質問の内容は、サーフィンやサーファーに関する項目と、サーファーの年齢、性別、出身、家族構成、学歴、仕事に関する項目で構成されている。サーフィンやサーファーに関する項目は、サーフィンを始めた時期やきっかけ、サーフィン友達の数やその関係性、サーフィンをする回数や、そのサーフィンスポットでのローカルとビジターについて、などである。

巻末資料に質問票を記載することにする。

2. 調査場所

今回の調査の目的は、ビジターサーファー、ローカルサーファー、種子島の移住サーファーの三者の比較である。しかし全国にサーフィンスポットは数多く存在し、すべてのサーフィンスポットで調査

することは困難である。そのため今回は日本海側、太平洋側、種子島の三つに分けて調査した。日本海側は福井県の鳥居浜、太平洋側は和歌山県の磯ノ浦海水浴場、鹿児島県種子島の鉄浜（かねはま）である。

3. 調査対象

以下は各スポットに来ているサーファーの方々に回答してもらった日付と人数である。

2006年11月14日（火）：日本海側鳥居浜 19人
 12月22日（金）：太平洋側磯ノ浦海水浴場 30人
 12月26日（火）：種子島鉄浜 11人
 2007年 1月 5日（金）：種子島鉄浜 12人

第3章 調査結果

第1節 地域別

以下は日本海側（鳥居浜）19人、太平洋側（磯ノ浦海水浴場）30人、種子島（鉄浜）は12月26日と1月5日の二日間の合計人数である23人のサーファーの方々の回答結果である。

Q1 サーフィンを始めたのはいつですか。

パーセント	日本海	太平洋	種子島
有効 中学生	0.0	3.3	0.0
高校生	21.1	20.0	26.1
大学生	10.5	10.0	0.0
社会に出てから	68.4	66.7	73.9
合計	100.0	100.0	100.0

Q2 サーフィンを始めたきっかけは何ですか。

パーセント	日本海	太平洋	種子島
有効 兄弟や親に誘われて	10.5	3.3	0.0
友人	73.7	50.0	65.2
サークル	0.0	0.0	0.0
サーフィンを見て	5.3	6.7	0.0
その他	10.5	40.0	34.8
合計	100.0	100.0	100.0

Q3 サーフィン友達は何人いますか。

パーセント	日本海	太平洋	種子島
有効 1～5人	42.1	46.7	13.0
6～10人	15.8	6.7	0.0
11～20人	15.8	26.7	26.1
21～30人	5.3	10.0	26.1
31～40人	10.5	6.7	34.8
41人以上	10.5	3.3	0.0
合計	100.0	100.0	100.0

Q5 海岸の清掃などのサーフィンに関する社会活動はしていますか。

パーセント	日本海	太平洋	種子島
有効 週1回以上	5.3	20.0	60.9
月2～3回程度	0.0	16.7	39.1
月1回程度	5.3	10.0	0.0
年5～9回程度	21.1	13.3	0.0
年1～4回程度	26.3	10.0	0.0
活動経験はない	42.1	30.0	0.0
合計	100.0	100.0	100.0

Q6 春から夏にかけて、サーフィンにはどのくらい行きますか。

パーセント	日本海	太平洋	種子島
有効 ほぼ毎日	0.0	13.3	78.3
週3回くらい	15.8	10.0	21.3
週1回くらい	47.4	23.3	0.0
月2回くらい	15.8	13.3	0.0
月1回くらい	10.5	16.7	0.0

い			
その他	10.5	23.3	0.0
合計	100.0	100.0	100.0

Q7 秋から冬にかけて、サーフィンにはどのくらい行きますか。

パーセント	日本海	太平洋	種子島
有効 ほぼ毎日	0.0	10.0	65.2
週3回くらい	5.3	6.7	34.8
週1回くらい	36.8	20.0	0.0
月2回くらい	36.8	23.3	0.0
月1回くらい	10.5	16.7	0.0
その他	10.5	23.3	0.0
合計	100.0	100.0	100.0

Q8 自宅から、このサーフィンスポットまでの所要時間はどれくらいですか。

パーセント	日本海	太平洋	種子島
有効 30分以内	0.0	13.3	69.6
30分～1時間	0.0	6.7	30.4
1～2時間	21.1	50.0	0.0
2～3時間	78.9	26.7	0.0
3時間以上	0.0	3.3	0.0
合計	100.0	100.0	100.0

Q9 このサーフィンスポットはローカルとビジター、どちらが多いと思いますか。

パーセント	日本海	太平洋	種子島
有効 ローカル	0.0	0.0	100.0
ビジター	68.4	20.0	0.0
どちらともいえない	31.6	80.0	0.0
合計	100.0	100.0	100.0

Q10 このサーフィンスポットで、あなたはローカルとビジターのどちらだと思いますか。

パーセント	日本海	太平洋	種子島
有効 ローカルだと思う どちらかといえばローカルだと思う	0.0	16.7	100.0
どちらかといえばビジターだと思う ビジターだと思う	10.5	16.7	0.0
合計	100.0	100.0	100.0

Q11 このサーフィンスポットで、ローカルとビジターとの間に温度差を感じますか。

パーセント	日本海	太平洋	種子島
有効 とても感じる	0.0	0.0	65.2
少し感じる	5.3	20.0	17.4
あまり感じない	42.1	63.3	17.4
全く感じない	52.6	16.7	0.0
合計	100.0	100.0	100.0

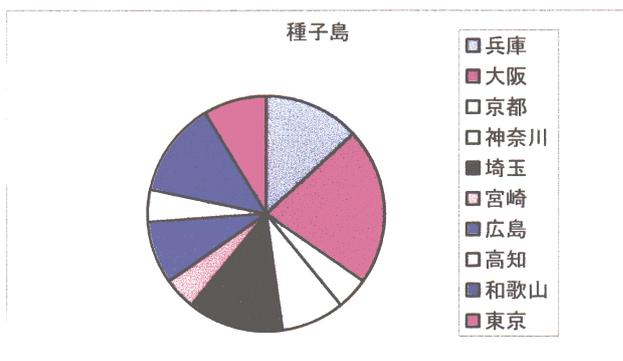
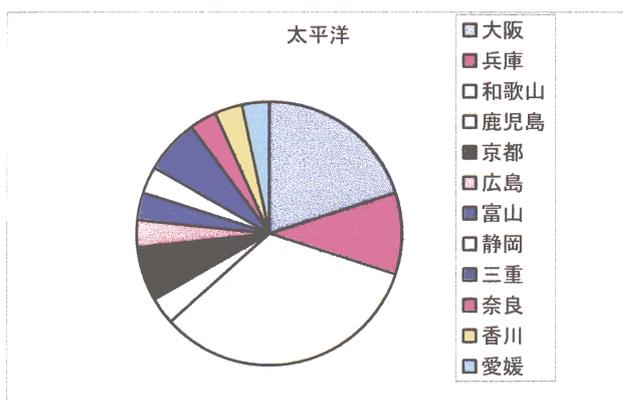
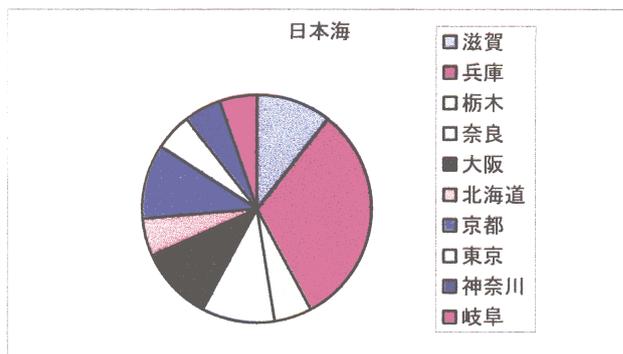
Q13 年齢

パーセント	日本海	太平洋	種子島
有効 20代	47.4	46.7	73.9
30代	42.1	40.0	26.1
40代	5.3	10.0	0.0
50代以上	5.3	3.3	0.0
合計	100.0	100.0	100.0

Q14 性別

パーセント	日本海	太平洋	種子島
有効 男	84.2	76.7	78.3
女	15.8	23.3	21.7
合計	100.0	100.0	100.0

Q15 出身(都道府県名)



Q17 家族構成

パーセント	日本海	太平洋	種子島
有効 一人暮らし	5.3	33.3	65.2
夫婦	15.8	10.0	0.0
親と同居	42.1	33.3	0.0
三世代(親・夫婦・子)	0.0	0.0	0.0
核家族(自分が親で、子供と住ん)	10.5	23.3	13.3

でいる)			
その他	26.3	0.0	21.7
合計	100.0	100.0	100.0

Q18 あなたが一番最後に出た(中退も含む)学校はどこですか。学生の方は、在学中の学校を教えてください。

パーセント	日本海	太平洋	種子島
有効 中学	5.3	0.0	8.7
高校	36.8	60.0	73.9
専門学校	21.1	13.3	13.0
短大	5.3	3.3	0.0
大学・大学院	31.6	23.3	4.3
合計	100.0	100.0	100.0

Q19 あなたの現在の仕事形態を教えてください。

パーセント	日本海	太平洋	種子島
有効 正社員	52.6	53.3	21.7
契約社員・パート・アルバイト・フリーター	21.1	26.7	65.2
学生	0.0	3.3	0.0
無職	10.5	6.7	0.0
自営	15.8	10.0	13.1
合計	100.0	100.0	100.0

Q20 あなたのお仕事は何ですか。

パーセント	日本海	太平洋	種子島
有効 農業	5.3	0.0	8.7
漁業	0.0	0.0	8.7
工業	26.3	16.7	8.7
建設業	15.8	16.7	0.0
サービス業	15.8	16.7	39.1
商業	0.0	6.7	8.7
公務員	0.0	3.3	0.0
団体職員	0.0	0.0	0.0

自営業	5.3	10.0	13.0
学生	0.0	3.3	0.0
無職	5.3	6.7	0.0
その他	26.3	20.0	13.0
合計	100.0	100.0	100.0

第2節 カテゴリー別

カテゴリー別の調査では、ローカルとビジターを区別する既存の定義がないため、前節の調査結果をもとにサーファー自身がローカルだと思うか、ビジターだと思うかをその二つを分類する定義とする。また前節の地域別の調査結果を見ると、今回調査したすべての種子島のサーファーが「ローカルだと思う」と回答していることがわかるが、カテゴリー別の調査では種子島のサーファーは「ローカル」ではなく、「種子島の移住サーファー」のカテゴリーに分類することにする。この「種子島の移住サーファー」というカテゴリーを設ける際問題になってくるのは、種子島のサーファーはすべて「移住」してきたサーファーなのか、ということである。種子島のすべてのサーファーが移住サーファーなのかは定かではないが、前節の地域別の調査結果の「質問15. 出身」のグラフを見ると、今回調査した種子島のサーファーはすべて鹿児島県（種子島）出身ではなかった。

この前節の調査結果からカテゴリー別の調査では、今回調査した種子島（鉄浜）のサーファー23人すべてが「移住サーファー」であると定義する。

また、カテゴリー別の調査の対象は、三者のサンプルの数を近づけるため、前節の地域別の調査結果で、ビジターサーファーのみであった日本海側（鳥居浜）のサーファー19人を除くことにする。

太平洋側の30人のサーファーのうち、ビジターサーファーは23人、ローカルサーファーは7人であった。種子島の移住サーファーは23人であった。

調査対象：ビジターサーファー : 23人
ローカルサーファー : 7人
種子島の移住サーファー : 23人

以下はその調査結果である。

Q1 サーフィンを始めたのはいつですか。

パーセント	ビジター	ローカル	種子島
有効 中学生	0.0	14.3	0.0

高校生	13.3	42.9	26.1
大学生	8.7	14.3	0.0
社会に出てから	78.3	28.6	73.9
合計		100.0	100.0

Q2 サーフィンを始めたきっかけは何ですか。

パーセント	ビジター	ローカル	種子島
有効 兄弟や親に誘われて	0.0	14.3	0.0
友人	47.8	57.1	65.2
サークル	0.0	0.0	0.0
サーフィンを見て	8.7	0.0	0.0
その他	0.0	28.6	34.8
合計	100.0	100.0	100.0

Q3 サーフィン友達は何人いますか。

パーセント	ビジター	ローカル	種子島
有効 1～5人	47.8	42.9	13.0
6～10人	0.0	0.0	0.0
11～20人	8.7	0.0	26.1
21～30人	34.8	42.9	26.1
31～40人	8.7	0.0	34.8
41人以上	0.0	14.3	0.0
合計	100.0	100.0	100.0

Q5 海岸の清掃などのサーフィンに関する社会活動はしていますか。

パーセント	ビジター	ローカル	種子島
有効 週1回以上	13.0	42.9	60.9
月2～3回程度	17.4	14.3	39.1
月1回程度	13.0	0.0	0.0
年5～9回程度	17.4	0.0	0.0
年1～4回程度	4.3	28.6	0.0

度			
活動経験は			
ない	34.8	14.3	0.0
合計	100.0	100.0	100.0

Q6 春から夏にかけて、サーフィンにはどのくらい行きますか。

パーセント	ビジター	ローカル	種子島
有効 ほぼ毎日	0.0	57.1	78.3
週3回くらい	8.7	14.3	21.3
週1回くらい	26.1	14.3	0.0
月2回くらい	17.4	0.0	0.0
月1回くらい	21.7	0.0	0.0
その他	26.1	14.3	0.0
合計	100.0	100.0	100.0

Q7 秋から冬にかけて、サーフィンにはどのくらい行きますか。

パーセント	ビジター	ローカル	種子島
有効 ほぼ毎日	0.0	42.9	65.2
週3回くらい	0.0	28.6	34.8
週1回くらい	21.7	14.3	0.0
月2回くらい	30.4	0.0	0.0
月1回くらい	21.7	0.0	0.0
その他	26.1	14.3	0.0
合計	100.0	100.0	100.0

Q8 自宅から、このサーフィンスポットまでの所要時間はどれくらいですか。

パーセント	ビジター	ローカル	種子島
有効 30分以内	0.0	57.1	69.6
30分～1時間	0.0	28.6	30.4

1～2時間	60.9	14.3	0.0
2～3時間	34.8	0.0	0.0
3時間以上	4.3	0.0	0.0
合計	100.0	100.0	100.0

Q9 このサーフィンスポットはローカルとビジター、どちらが多いと思いますか。

パーセント	ビジター	ローカル	種子島
有効 ローカル	0.0	0.0	100.0
ビジター	17.4	28.6	0.0
どちらともいえない	82.6	71.4	0.0
合計	100.0	100.0	100.0

Q11 このサーフィンスポットで、ローカルとビジターとの間に温度差を感じますか。

パーセント	ビジター	ローカル	種子島
有効 とても感じる	0.0	0.0	65.2
少し感じる	17.4	28.6	17.4
あまり感じない	69.6	42.9	17.4
全く感じない	13.0	28.6	0.0
合計	100.0	100.0	100.0

Q13 年齢

パーセント	ビジター	ローカル	種子島
有効 20代	47.8	42.9	73.9
30代	39.1	42.9	26.1
40代	8.7	14.3	0.0
50代以上	4.3	0.0	0.0
合計	100.0	100.0	100.0

Q14 性別

パーセント	ビジター	ローカル	種子島
有効 男	69.6	100.0	78.3
女	30.4	0.0	21.7

合計	100.0	100.0	100.0
----	-------	-------	-------

Q17 家族構成

パーセント	ビジター	ローカル	種子島
有効 一人暮らし	26.1	57.1	65.2
夫婦	13.0	0.0	0.0
親と同居	34.8	28.6	0.0
三世代(親・夫婦・子)	0.0	14.3	0.0
核家族(自分が親で、子供と住んでいる)	26.1	0.0	13.3
その他	0.0		21.7
合計	100.0	100.0	100.0

Q18 あなたが一番最後に出た(中退も含む)学校はどこですか。学生の方は、在学中の学校を教えてください。

パーセント	ビジター	ローカル	種子島
有効 中学	0.0	0.0	8.7
高校	65.2	42.9	73.9
専門学校	13.0	14.3	13.0
短大	4.3	0.0	0.0
大学・大学院	17.4	42.9	4.3
合計	100.0	100.0	100.0

Q19 あなたの現在の仕事形態を教えてください。

パーセント	ビジター	ローカル	種子島
有効 正社員	56.5	42.9	21.7
契約社員・パート・アルバイト・フリーター	30.4	14.3	65.2
学生	0.0	14.3	0.0
無職	8.7	0.0	0.0
自営	4.3	28.6	13.1
合計	100.0	100.0	100.0

Q20 あなたのお仕事は何ですか。

パーセント	ビジター	ローカル	種子島
-------	------	------	-----

有効	農業	0.0	0.0	8.7
	漁業	0.0	0.0	8.7
	工業	13.3	28.6	8.7
	建設業	21.7	0.0	0.0
	サービス業	21.7	0.0	39.1
	商業	8.7	0.0	8.7
	公務員	0.0	14.3	0.0
	団体職員	0.0	0.0	0.0
	自営業	4.3	28.6	13.0
	学生	0.0	14.3	0.0
	無職	8.7	0.0	0.0
	その他	21.7	14.3	13.0
	合計	100.0	100.0	100.0

第4章 考察

第1節 地域別

まず、日本海側（鳥居浜）と太平洋側（磯ノ浦海水浴場）のサーファーを比較してみると、多くの質問の回答結果に違いは見られなかった。その要因として考えられることはビジターサーファーとローカルサーファーの割合である。太平洋側（磯ノ浦海水浴場）では「ビジターだと思う」と答えた人が30人中18人、「どちらかといえばビジターだと思う」と答えた人が30人中5人で、両者をあわせると30人中23人となり、ビジターサーファーは全体の8割近くを占めている。日本海側では今回調査した19人は「どちらかといえばビジターだと思う」「ビジターだと思う」のいずれかを選択し、19人すべてがビジターサーファーであった。このように二つのサーフィンスポットはどちらも圧倒的にビジターサーファーが多かった。波は季節やその日の天候によって変化するため、多くのビジターサーファーは季節やその日の波の状況によってサーフィンをするポイントを変える。そのためビジターサーファーは日本海側にも太平洋側にもサーフィンをしに行く。

つまり、その時々によりビジターサーファーは「日本海側」のビジターサーファーになったり、「太平洋側」のビジターサーファーになったりする。日本海側と太平洋側のサーファーとの間に相違点が見られなかったのは、このように流動的にポイントを変えるビジターサーファーを多数含んだためだと考えられる。

また、日本海側（鳥居浜）のサーファーの話によると、今回調査した鳥居浜というサーフィンスポットはもともとローカルサーファーは少ないということだった。同じ日本海側でもローカルサーファーが多く集まるスポットやビジターサーファーが多いスポットなど、場所場所によって違いがあるということがわかった。

日本海側（鳥居浜）と太平洋側（磯ノ浦海水浴場）のサーファーの回答に違いが見られなかったのに対して、種子島（鉄浜）のサーファーには大きな違いがあった。日本海側、太平洋側の両者はともにビジターサーファーが圧倒的に多かったのにたいして、種子島のサーファーは23人中23人が「ローカルだと思う」を回答している。ほかの2ヶ所のサーファーと種子島のサーファーの回答の違いはこの意識の違いによって引き起こされていると考えられる。種子島のサーファーは「質問6. 春から夏にかけて、サーフィンにはどのくらい行きますか。」では、ほぼ毎日：65.2%、週3回くらい：21.7%と回答している。一方日本海側では、ほぼ毎日：0%、週3回くらい：15.8%、太平洋側では、ほぼ毎日：13.3%、週3回くらい：10%にとどまっている。同じように「質問7. 秋から冬にかけて、サーフィンにはどのくらい行きますか。」では、種子島のサーファーはほぼ毎日：65.2%、週3回くらい：34.8%と回答しているのにたいして、日本海側では、ほぼ毎日：0%、週3回くらい：5.3%、太平洋側では、ほぼ毎日：10%、週3回くらい：6.7%にとどまっている。

また「質問8. 自宅から、このサーフィンスポットまでの所要時間はどれくらいですか。」では、種子島のサーファーは30分以内：69.6%、30分～1時間：30.4%であるのに対して、日本海側は30分以内、30分～1時間は0%、太平洋側は30分以内：13.3%、30分～1時間：6.7%であった。

このように種子島のサーファーの多くは自分をローカルサーファーと感じている。そしてサーフィンスポットの近くに住み、1週間のうち多くの日サーフィンをするということがわかった。日本海側、太平洋側と種子島のサーファーの間にこのような違いが出るのは、もちろん種子島のサーファーがサーフィンをするため種子島に移住してきているからである。

サーフィンがしたくて種子島に移住する、つまり「ローカル」になる。そして好きなサーフィンを毎日する。サーフィンスポットの近くに住む。日本海側や太平洋側のサーファーにくらべ、種子島のサーファーが週にサーフィンをする回数が増え、サーフィンスポットの近くの住んでいる割合が高くなるのは当然である。

そしてこの「移住」がもう一つ、種子島のサーファーとほかの2ヶ所のサーファーとの間に違いを生じさせている。「質問19. あな

たの現在の仕事形態を教えてください」という項目に注目すると、日本海側、太平洋側のサーファーの両者とも正社員の割合が52.6%、53.3%と半数に達しているのに対して、種子島のサーファーの正社員の割合は21.7%にとどまり、契約社員・パート・アルバイト・フリーターの割合が65.2%と6割を超えている。これは種子島という労働力の需要が少ない地理的にも経済的にも不利な離島に移住した種子島のサーファーの特性のひとつであるといえる。

また日本海側や太平洋側のサーファーに比べ、サーフィン友達の数が多いのも種子島のサーファーの特質と言え、これは移住する前に知り合った友達と移住後の知り合った友達の両方が合わさるからだと考えられる。

移住する前に関係する質問（サーフィンを始めたきっかけやサーフィンを始めた時期）や年齢、学歴などは、日本海側、太平洋側とあまり違いは見られなかった。これは「第1章の種子島のサーファーについて」で述べたように、種子島の移住サーファーの多くは関西や関東などの都市圏から移住してきたものが多いことが要因であるとされる。つまり、種子島のサーファーは、もともと都市圏からサーフィンスポットにサーフィンをしに行くビジターであったため、違いが見られなかったと考えられる。

今回の調査は日本海側（鳥居浜）、太平洋側（磯ノ浦海水浴場）、種子島（鉄浜）の3箇所で調査を行ったが、日本海側と太平洋側のサーファーの地域の違いは見られなかった。これは今回調査の対象になったサーファーが日本海側、太平洋側の両者ともビジターサーファーが多かったことが要因と考えられる。これに対して種子島のサーファーはほかの2ヶ所のサーファーと比べると、一週間のうちサーフィンにいく頻度やサーフィンスポットまでの所要時間、サーフィン友達の数、現在の仕事形態など、明らかな違いが見られた。

そしてこの違いは多くの場合、「移住」によって引き起こされたものと考えられる。

しかし、今回の調査の真の目的はビジターサーファーとローカルサーファー、種子島の移住サーファーを比較、検討し、その相違点、特性を見つけることである。そのため次節では地域別ではなくビジターサーファー、ローカルサーファー、種子島の移住サーファーの三つのカテゴリーに分けた調査結果を比較、検討していきたいと思う。その際に前章でも述べたが、今回の調査ではローカル、ビジターの既存の定義がないため、サーファー自身がローカルだと思うか、ビジターだと思うかをその二つを分類する定義とする。また今回調査したすべての種子島のサーファーが「ローカルだと思う」と回答したと述べたが、次節では種子島のサーファーは「ローカル」ではなく、「種子島の移住サーファー」のカテゴリーに分類することにす

る。

第2節 カテゴリー別

まず、ビジターサーファーとローカルサーファーを比較してみる。

「質問1、サーフィンを始めたのはいつですか。」では、ビジターサーファーが「社会に出てから」が8割近くに達するのに対し、ローカルサーファーは「高校生」が半数近くを占めている。サーフィン始める時期はローカルサーファーはビジターサーファーに比べ、若干早いといえる。

質問2、は両者に違いは見られなかった。

「質問3、サーフィン友達は何人いますか。」では、両者とも「1～5人」が半数近くを占め、「21人～30人」が次に多かった。ローカルサーファーはそのサーフィンスポットの近くに住み、ビジターサーファーにくらべサーフィンをより多くしているため、サーフィン友達の数に違いが見られると思われたが、今回の調査では意外にもローカルサーファーとビジターサーファーとの間にサーフィン友達の数には違いが見られなかった。

「質問5、海岸の清掃などのサーフィンに関する社会活動をしていますか。」では、ローカルサーファーの半数近くが「週1回以上」と回答しているのに対し、ビジターサーファーは13.3%にとどまっている。この結果はローカルサーファーとビジターサーファーのとのサーフィンに行く頻度の違いによるものだと考えられる。もうひとつの要因としては「海岸の清掃」という表現があいまいであったことが考えられる。自分の出したゴミはきちんと持ち帰る。海から出て車に帰る途中に、ビーチの目にはいったゴミを拾う。定期的に行われるビーチクリーンに参加するなど、人によって「海岸の清掃」の捉え方がまちまちであった。そのため、今回の調査のこの質問ではビジターサーファーとローカルサーファーとの相違点を見出すことはできないと考えられる。

「質問6、春から夏にかけて、サーフィンはどのくらい行きますか。」ではローカルサーファーが「ほぼ毎日」が半数以上、「週3回くらい」「週1回くらい」を合わせると全体の8割以上を占めるのに対し、ビジターサーファーは「週1回くらい」「月1回くらい」で半数を占めた。また「その他」の回答が多かったのは調査対象のサーファーのなかに、まだ始めたばかりのサーファーがいたことが原因である。

質問7は質問6とほぼ同じ結果であった。

「質問8、このサーフィンスポットまでの所要時間はどれくらいですか。」では、ローカルサーファーは「30分以内」が半数以上、

「30分～1時間」を合わせると8割を超えた。ビジターサーファーは「1時間～2時間」が60.9%、「2時間～3時間」が34.8%であり、予想どおりの結果であった。

質問11、質問13、質問14、質問17では、両者に違いは見られなかった。

「質問18、あなたが一番最後に出た（中退を含む）学校はどこですか。学生の方は、在学中の学校を教えてください。」では、ローカルサーファー、ビジターサーファーとも「高校」と回答した人が42.9%、65.2%と最も多かった。しかし注目すべき点は、ビジターサーファーが「大学・大学院」17.4%にとどまっているのに対して、ローカルサーファーは「大学・大学院」42.9%と「高校」と同じ割合まで達していることである。今回の調査ではローカルサーファーとビジターサーファーの間には「学歴」の違いが見られた。

「質問19、あなたの現在の仕事形態を教えてください。」では、ローカルサーファー、ビジターサーファーとも正社員が半数程度であった。特徴としては、ローカルサーファーは「自営」が28.6%とビジターサーファーより多かったである。

「質問20、あなたのお仕事は何ですか」では、ビジターサーファーが建設業：21.1%、サービス業：21.7%、工業：13%と続いている。ローカルサーファーは工業：28.6%、自営業：28.6%、公務員：14.3%と続いている。

両者とも「その他」の割合も高いため、両者ともさまざまな職種の人がいると考えられるが、特徴としてはビジターサーファーは建設業や工業など、比較的「低学歴」でも仕事に就ける職種が多く、ローカルサーファーは自営業や公務員などビジターサーファーにはない職種が並んでいる。

種子島の移住サーファーを見てみると、前節で地域別に比較したものとあまり違いが見られなかった。これは種子島の移住サーファーの多くがローカルサーファーとビジターサーファーの両方の性質を持っていることが要因であると考えられる。前節でも述べたように、種子島の移住サーファーは移住する前は関西などの都市圏に住むビジターサーファーであることが多い。このため学歴などはビジターサーファーに近い。また種子島に移住した後はそのサーフィンスポットの「ローカルサーファー」になるため、サーフィンに行く頻度やサーフィンスポットまでの所要時間などはローカルサーファーに近くなる。

しかし、種子島の移住サーファーとほかの二者のサーファーとの間にも相違点はある。

現在の仕事の形態である。ほかの二者が「正社員」が半数くらい

るのに対し、種子島の移住サーファーは「契約社員・パート・アルバイト・フリーター」が6割を超えていることである。これは種子島という経済的にも地理的にも不利な「離島」という側面によるものだと考えられる。

第5章 結論

今回の調査で日本海側（鳥居浜）、太平洋側（磯ノ浦海水浴場）の二つの地域においてのサーファーには違いが見られなかった。種子島（鉄浜）のサーファーに関しては、種子島という「離島」であるがゆえにほかの二者と違いが見られた。その違いとは、現在の仕事の形態などである。「離島」という経済的にも地理的にも不利な環境が種子島のサーファーの仕事の形態を「正社員」より「契約社員・パート・アルバイト・フリーター」の数を増やしたのだ。

そして今回の調査の目的であるビジターサーファーとローカルサーファーの相違点であるが、筆者は第1章で「ビジターサーファーとローカルサーファーとの相違点は学歴、職種である」という仮説を立てた。今回の調査結果はある程度筆者の仮説を立証するものであった。

また第1章で触れた「ローカルサーファーとビジターサーファーの定義」についてであるが、今回の調査では、ローカルサーファーとビジターサーファーとの間に、サーフィン友達の数、海岸の清掃などの社会経験の違いは見られなかった。しかしサーフィンスポットまでの所要時間、サーフィンに行く頻度には違いが見られた。このことから今回の調査ではローカルサーファーとビジターサーファーとを分ける要因はこの二つであると考えられる。

種子島の移住サーファーについては、ローカルサーファーとビジターサーファーの両方の性質を持っていることがわかった。そして種子島の移住サーファーの大きな特徴は、種子島の経済的にも地理的にも不利な「離島」という側面が引き起こすものであるとわかった。

おわりに 今後の課題

今回の調査はビジターサーファーとローカルサーファー、そして種子島の移住サーファーを比較、検討し、三者の相違点や特性を見つけ出すことであった。しかし、サーフィンに関する先行文献は少なく、作業は予想以上に難航した。いざ、アンケート調査に行っても、調査の季節が秋から冬にかけてだったからか、思うようにサン

ブルが揃わず大変苦労した。結局予定よりもかなりサンプル数が少ない調査になってしまった。

そんなこともあって、今回の調査がビジターサーファー、ローカルサーファー、種子島の移住サーファーの特性や相違点を完璧に捉えたものとは思っていない。しかし今回サーファーに関して調査や執筆をしてみて、今後の課題が見えてきた気がする。今回の調査では年齢や職業、サーフィンをする頻度、サーフィン友達の数などを設問しただけで、サーファーの心理面を探ってはいない。もしかしたらこの三者には「将来に関する考え方」や「社会に対する考え方」に違いがあるかもしれない。

また今回調査の際に多くのサーファーに出会った。私の印象としては年齢が40歳以上のサーファーの人々は大学卒業が多かったように感じた。これは第1章で述べた日本のサーフィンの受容過程に関係があるのではないかと感じた。

このように、今まであまり研究されてこなかったサーファーという調査対象にはまだまだ新しい発見が隠されているように感じる。

《参考文献》

『種子島のサーファー移住：自然の発見と新たな人間的統合の創出』
(内藤 考至 2004)

『日本におけるサーフィンの受容過程』(小長谷 悠紀 2005)

《巻末資料》

質問票

1. サーフィンを始めたのはいつですか。

①小学生 ②中学生 ③高校生 ④大学生 ⑤社会に出てから

2. サーフィンを始めたきっかけは何ですか。

①兄弟や親に誘われて ②友人 ③サークル ④サーフィンを見て ⑤その他

3. サーファー友達は何人いますか。

①1~5人 ②6~10人 ③11~20人 ④21~30人 ⑤31~40人 ⑥41以上 ⑦いない

4. サーファー友達との関係はどのようなものですか。(該当するもの全てに○)

①話し相手 ②サーフィン以外の遊びをいっしょにする ③サーフィン技術の話

④悩み事の相談 ⑤物のやりとり ⑥金銭の貸し借り ⑦仕事の相談

5. 海岸の清掃などのサーフィンに関する社会活動をしていますか。

- ① 週 1 回以上 ② 月 2 ～ 3 回程度 ③ 月 1 回程度 ④ 年 5 ～ 9 回程度 ⑤ 年 1 ～ 4 回程度
⑥ 活動経験はない

6. 春から夏にかけて、サーフィンにはどのくらい行きますか。

- ① ほぼ毎日 ② 週 3 回くらい ③ 週 1 回くらい ④ 月 2 回くらい ⑤ 月 1 回くらい
⑥ その他

7. 秋から冬にかけて、サーフィンにはどのくらい行きますか。

- ① ほぼ毎日 ② 週 3 回くらい ③ 週 1 回くらい ④ 月 2 回くらい ⑤ 月 1 回くらい
⑥ その他

8. 自宅から、このサーフィンスポットまでの所要時間はどれくらいですか。

- ① 30 分以内 ② 30 分から 1 時間 ③ 1 ～ 2 時間 ④ 2 ～ 3 時間 ⑤ 3 時間以上

9. このサーフィンスポットはローカルとビジター、どちらが多いと思いますか。

- ① ローカル ② ビジター ③ どちらともいえない

10. このサーフィンスポットで、あなたは自分がローカルとビジターのどちらだと思いますか。

- ① ローカルだと思う ② どちらかといえばローカルだと思う
③ どちらかといえばビジターだと思う ④ ビジターだと思う

11. このサーフィンスポットで、ローカルとビジターとの間に温度差を感じますか。

- ① とても感じる ② 少し感じる ③ あまり感じない ④ 全く感じない

12. よければその理由をお答えください。

--

13. 年齢

- ① 10 代 ② 20 代 ③ 30 代 ④ 40 代 ⑤ 50 代以上

14. 性別

- ①男 ②女

15. 出身（都道府県名）

16. 現在住んでいる場所

17. 家族構成

- ①一人暮らし ②夫婦 ③親と同居 ④三世代（親・夫婦・子） ⑤核家族
（自分が親で、子供と住んでいる） ⑥その他

18. あなたが一番最後に出た（中退を含む）学校はどこですか。学生の人は、在学中の学校を教えてください。

- ①中学 ②高校 ③専門学校 ④短大 ⑤大学・大学院

19. あなたの現在の仕事形態を教えてください。

- ①正社員 ②契約社員・パート・アルバイト・フリーター ③学生 ④無職
⑤自営

20. あなたのお仕事は何ですか。

- ①農業 ②漁業 ③工業 ④建設業 ⑤サービス業 ⑥商業 ⑦公務員
⑧団体職員
⑨自営業 ⑩学生 ⑪無職 ⑫その他

（400字詰め原稿用紙 51枚）